
軽四に乗った関西人 異世界にて

kyworks

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

軽四に乗った関西人 異世界にて

【Nコード】

N7749Q

【作者名】

kyworks

【あらすじ】

関西地方 n県在住の大学生が軽四に乗ってドライブ中に突如として現れた光に包まれて異世界に飛ばされる。

大した能力も持たず、ケンカも人並み。

頼れるのは、軽四とスマートフォン、。ahoo知恵袋、。ixi、タバコ。

そんな彼が異世界にてある大事件に巻き込まれていく・・・という

よくある異世界物の物語です。

旅立ち

時刻は午前1時。

俺は自慢の軽四（親の車）で県内を南北に縦断するバイパスを軽快に飛ばしていた。

「リカちゃん可愛かったなあ。次はいつ遊ぼうかなあ？ 今日の感じやったら次くらいは落とせるとちゃうか？」

俺は今日、狙っている女の子とドライブデートに行ってきた。そして今、その余韻に浸りながら帰路に就いているのである。

自然に表情が緩んでくる。

恐らく今の俺の顔はキモいだろう。

でもそんなことはどうでもいい。

今はどういう風に告るかが重要かつ優先すべき問題なのだ。

「俺のそばにいて欲しい・・・なんかちゃうなあ。俺のキャラやともっとこう・・・軽い感じのがいいかもな」

一人でぶつぶつ呟きながら、来る告白の瞬間に向けてイメージトレーニングを行う。

「俺さ、お前のことが好きやねん。だから付き合ってくれ。．．んゝおいしいけど、ちゃうな」

そんな感じで俺の妄想が膨らみつつある、その時。

俺の愛用のスマートフォンがメールの受信を知らすために、ぶるぶるとポケットの中で振動した。

「あ、もしかして」

俺は片手でハンドルを持ち、ポケットからスマートフォンを取り出す。

《あんた、いつまで遊んでんの？はよ帰ってきていや。おかん、明日車使っねんから。》

スマートフォンの画面に映る送信者の名前は母親であり、内容は以上の通りだった。

「ーっオカンかよっ！」

これほどの裏切りはないだろう。皆さんも経験があるはずだ。

この時ほどの裏切られた感じは、この20年の人生で五本の指に入るほどだ。

俺はそのままスマートフォンの電源を切ると、助手席に荒々しく投げ置いた。

「返せ、俺の純情！ときめきを！」

そして怒りに任せてアクセルを思いっきり踏み込む。

軽四だから可哀想なくらいにエンジンが唸り声をあげた。

しかしその反面、速度はそれほど上がらない。

車まで俺をバカにするのか。

積みもりつもった苛立ちを解消すべく、俺はダッシュボードの上に置かれたタバコを手に取り、一本くわえると火を付けるべくポケットからライターを取りだそうとする。

しかし俺の手には何の手応えも感じられない。

「あれ、どこや」

周囲を見渡すと、自分の足下に転がっているライターを発見。

少々危険だが身を屈めて、ライターを救出しようとする。

と、そのとき。

けたたましいクラクションの音が響き、目の前が一気に明るくなった。

「あ、」

目の前に迫るダンプカー。

もはや回避運動もブレーキも行うには遅すぎた。

がっしゃーん！！

目の前が真っ暗になった。

異世界

鳥のさえずりが聞こえる。

その他にも水が流れる音や、木々の木の葉が風によって擦れる音も聞こえた。

「う、くそ・・・」

俺は今まで意識を失っていたようだ。

頭が激しく痛むが、その他に痛むところがない。

きつとここは病院で、緊急手術で奇跡的に助かったのだろう。

ああ、神様感謝します。

激しい頭痛が収まってきたところで、俺は目をゆっくりと開けて体を起こした。

あれ、なんか体が拘束されている気が……

体をよく見ると、なぜかシートベルトがしっかりと装着されているではないか。

そしてなぜ、俺は車の中にいるのだろうか。

そしてなぜ、目の前に巨大な大木が存在しているのだろうか。

「……えっと、なんじゃこりゃ」

状況がまるで理解できない。

俺は確かダンプカーと正面衝突したはず。

あの勢いじゃ生きている訳がない。

ということはここはあの世というやつか？

いやいや、なんであの世に車も一緒に来てんねん。

そして見たところ、車も外傷はない感じで、エアバッグすら出ていない。

「夢でも見てんのか？」

試しに俺は自分の頬を思いっきりつねってみた。

が、痛いだけで夢オチということはなさそうである。

とりあえず、外に出てみるか。

俺はドアを開けて、ゆっくりと車の外に出る。

ひんやりとした空気が心地よかった。

「一体どこやねん、ここ」

バイパスの下に落ちたとしても、こんな大森林なんかあるはずなく、第一に俺と車が無傷でいられるはずがない。

「あ、そうや。警察に電話しやんと」

俺は慌てて車内に置いていたスマートフォンを手を取った。

110・・・っと。

プル
ル
ル
ル
ル
ル
ル
ル
・
・
・
・

ガチャ・

《おかけになった電話番号は・・・》

「警察の電話番号が使われてないとか、ありえんやろ!!」

俺は通話を切ると、再度かけなおした。

だが、結果は同じだった。

その後、親や友人、バイト先と色々なところに電話をかけてみたが、すべて繋がらず、俺はだんだん不安になってきた。

異世界2

不安になったところで、俺は一旦車の中に戻ることにした。ちょうど体も冷えてきたし。

車内に入ると、とりあえずドアをロックし、暖房をつけてHDD付きのカーステで音楽をかけることにした。

曲は俺の大好きなロックバンドの曲。

車でドライブするときは決まってこのアーティストの曲を聴いていた。

激しいテンポの曲に自然と口から歌詞がこぼれる。

少し落ち着いた気がした。

「そうや。ナビつけてみたらどうやろ？」

そう思った俺はHDDのタッチパネルを操作して、カーナビを起動させると現在地の検索を行った。

しばらく画面にロード中を表す表示が点滅を繰り返す。

だがしかし、画面に現れたのは検索不明を表す文字だけだった。

期待していただけに、落胆が大きい。

電話も通じず、ナビも役に立たない。

おまけに日も傾いてきた。

「嘘やろ・・・勘弁してくれよ」

カーステから流れる陽気な声とは裏腹に、俺の気持ちは沈む一方だった。

それから数時間が経った。

さつき分かったことなのだが、スマートフォンや車の時計が事故った時刻、午前1時から全く経ってないのだ。

故障かとも思ったが、スマートフォンはしっかり機能しているし、車もエンジンはかかる。

それに意識を回復したのが昼ぐらいだったので、時間が止まっていることはまずない。

俺には一体どういうことなのか、さっぱり分からなかった。

そうこうしているうちに腹も減ってきた。

これが不幸中の幸いか、ドライブレコーダーする際にパンやお菓子、飲み物を買っており、いくらが残っていたことを俺は思い出して、後部座席からそれらの食料が入ったビニール袋を取り出した。

パンを一口、口にするとまるで何かを思い出したかのように、一心不乱にかじりつく。丸一日何も食べていなかったから、相当腹が空いていたのだろう。

少し落ち着いたところで、ペットボトルの蓋を開けて、お茶を飲む。

「はー。満足満足」

といって俺はドアを開けて外へと出た。タバコを吸う為である。

夜になってから気温がだいぶ下がったようで、ダウンを着ていてもなかなか寒かった。

「夜になってもうたな。・・・これからどうしたらええんやろ」

救助を乞うこともできないし、何よりここがどこかも分からない。

結構ピンチな状況に立たされている。

いわゆる遭難ってやつかもしれない。

タバコをふかしながら、これからの行動について考えてみる俺。

こついう状況は初めてなので、どうしたらいいか分からないが案外
落ち着いている自分がいた。

「とりあえず寝るか。明るくなってから行動しよう」

そう結論に至った俺は早速車内に戻り、車に備え付けていた毛布に
くるまり、ゆっくり目を閉じた。

現地人との遭遇Ⅱピンチ

遭難してから二日目の朝を迎えた。

もしかしたら、目覚めたらベッドの上だったとかいう甘い期待は悉くぶち壊され、相変わらず狭い車内に毛布にくるまる俺が存在していた。

「朝、か」

時刻にすれば、朝の9時くらいだろうか。
さんさんと照りつける太陽が眩しい。

夜の寒さも嘘だったかのように、今はぽかぽかしていて心地よかった。

「あー、やっぱり現実かよ。夢やったらさっさと覚めろやー」

そんな俺の文句も虚しく、辺りに響きわたるだけだった。

それから軽い朝食（かなり節約した）を済ませ、一服をしてから俺は車に戻り、シートベルトを締めた。

そしてエンジンをかけ、ギアをPからDに入れる。

「よし。行動あるのみや。とりあえず動こつ」

アクセルをゆつくりと踏み、車を進ませる。

しかし何分、路面が舗装されていないので車は進む度に上下に激しく揺れた。

「くそ、サスがいかれそうやん」

おまけに軽四だから、こういう環境を走行するのには適していない。だからバンパーを岩で擦ったりして、俺の気分は最悪だった。

これ、オカンが知ったら殺されるやろうな。

そんなこんなでしばらく走っていると、ようやく道が開けてきた。アスファルトで舗装はされていないものの、走る分には良い路面状態だ。

やっとともに走れるようになったからか、俺はカーステを起動して音楽を好きなアーティストの曲を爆音で流しながら、舗装された道を進んだ。

「俺のハートはラブリーハート♪君を必ず捕まえるぜえー♪」

自分の状況もすっかり忘れた俺は、どこかにドライブにでも来たかのように歌を口ずさんでいた。

道の両サイドにはたくさんの木。眩しい太陽、どこまでも続くまっすぐな道。

ドライブには適した環境だ。

もともと俺はドライブが大好きなのだ。

こんな素敵な道を走れば、今の状況なんかすぐに忘れることなど簡

単だ。

「ああ、君を今すぐ抱きしめたいーっつて、あれ？」

俺は歌うのをやめた。

その理由は12時の方角、距離200程度に人影らしきものを発見したからだ。

「あれって人やん！久しぶりに人に会えた！」

とりあえずここはどこか訪ねてみよう。

そう判断した俺は急いで車をその人に向かわせた。

ところが、あともう少しというところで、その人は何かに怯えたように一目散に逃げ出してしまった。

俺はその人を追おうとしたが、その人は森の中へと入って行ってし

まったので諦めるほかなかった。

でも手がかりはある。

ここに人がいたということは近くに街があるということだ。それはこの道も保証している。

街に行けば電波もあるだろうし、ここがどこかも分かる。

そうと決まれば、早速俺は人が歩いてきた方向に向けて、車を進ませた。

車を走らせ約15分。

ようやく建造物らしきものが視界に入ってきた。

だが、街というよりは村に近く、何やら丸太でできた柵が村の周囲に張り巡らされている。

どうも様子がおかしいので、俺は車を村の入り口らしき所へと近づ

けた。

すると驚いたことに、入り口付近に立っていた男が、こちらを見た瞬間大きな声を出した。

その声を聞きつけたのか、村の中からわらわらと人がたくさん出てきたではないか。

しかもその手には物騒な物が握られている。

「ええっ！？　なに？　なんなん？」

俺がそんな彼らに驚いていると、一人の男が一步前に出てきた。

よく見ると外人である。

「魔物に告ぐ！　これより先は我が村の領域である！　もし一步でも踏み入るならば、容赦はせぬぞ！」

と、言ってきたのである。

「ちよ、何言ってるの、あの外人。しかも日本語ばり上手いし」

男たちはすごい形相で俺のほうを睨み付けてくる。

それも今にも飛びかからん勢いで。

これは何かの映画の撮影だろうか？

それにしては撮影を行うスタッフの姿が見あたらない。

俺はとりあえず話しだけでもと、車の外に出た。

しかしその瞬間、俺の足下にズドッと何かが突き刺さった。

「え、矢？」

「突撃ー！！！！」

男たちが俺の方向に突撃してきた。

「うわ、ちょちょ・・・待ってや！」

瞬く間に俺は男たちに取り押さえられたのだった。

p r i s o n

「お、おい！ 何やねん！ 離せや、こら！」

「黙れ！ 暴れるな、この魔物の手先め！」

「なに訳分からんこと言ってんねん！ 警察呼ぶぞ、こら！」

俺はなぜか分からないが、拘束されていた。

手首には堅い藁で出来たロープを巻かれ、両脇には屈強な外人のオッサン二人。

村の中心より少し離れた、煉瓦造り小さな小屋へと連行中である。

正直、何が何だか訳が分からず、ただ必死にもがくしか出来ない。

それに余りにも急な出来事だったので、足がすくんでオッサンたちに引きずられる感じで小屋の中に入れられた。

って言うかもろ牢屋やん、ここ。

ガチャン・・・

頑丈そうな鉄格子の扉が閉められると、オッサンのうち、一人は外に出ていき、もう一人は中に留まった。

「おい、これって誘拐ってやつやろ！監禁するつもりか！？俺、そんな趣味あらへんぞ！」

こんな不細工なオッサンにF。CKされるくらいなら、死んだほうがましだ。

「ふん、いくら吠えたところで今更無駄だ。貴様は公開処刑をされるのだからな」

不適な笑みを浮かべながら、オッサンは言う。

公開処刑！？ 新手のプレイか？

つか、つくづく日本語上手いな、このオッサン。〇ーブ・スペクタ
ーより発音上手いし。

「意味分かんわ！ってか、ここどこやねん！？教えろや、ハゲ！」

「だ、誰がハゲだ！！口を慎め、この魔物の使い魔めが！」

「そうゆう危ない妄言はやめろ！いい年こいてよ！」

「っ！、その減らず口、二度ときけないようにしてやる！」

オッサンはそう言つと、おもむろに腰に携えていた棍棒みたいなものを手に取ると、牢屋の鍵を開けて中に入ってきた。

「な、何するつもりやねん！？」

「フン、すぐに分かる・・・」

ドス・・・

「ぐはっ・・・」

言葉にならないような痛みが全身に響いた。

腹を見ると棍棒が、鳩尾あたりにめり込んでいた。

息ができひん・・・

俺はその場にしゃがみ込む。

「どうした。先ほどの威勢はどこへ消えた？」

ドガ・・・

「うぐっ」

今度は背中に衝撃が走った。

「お前らのような汚らわしき存在は全て滅べばいいんだ！」

オッサンが何かを叫んだかと思うと、再び衝撃が。
今度は顔面だ。

どうやら足で蹴られたらしい。

俺はそのまま仰向けになり、倒れ込む。

「はは、このままじゃ俺が処刑しちまいそうだぜ。だからな、もう
ちよっとねばってくれなきゃ困るんだよ！」

オッサンはそう言いながら、俺の腹を思いつきり踏みつけた。

「つつつ！！！！」

胃から何かが逆流してきた。

我慢できずに、その場に吐いてしまった。

「・・・汚い奴め」

オッサンが棍棒を大きく振り被った。

つと、そのとき。

誰かが小屋の中に入ってきた。

「おい、そろそろ集会の時間だ。施錠して直ちに礼拝堂に集まれ」

オッサンはそれを聞くと棍棒をゆっくり下ろして、不敵な笑みを浮かべた。

「助かったな？ でも覚悟しておけ。次はもっと痛めつけてやるかな」

そう言い残すと、オッサンは俺の血のついた棍棒を投げ捨てると、牢屋の鍵を閉めて外へと出ていった。

「くっ・・・クソが・・・」

俺はただ呻くことしか出来なかった。

救世主・・・現れる？

それから数時間が経った。

暴行されていた時より、辺りは暗くなってきた、体力が著しく減った俺に隙間風が容赦なく襲いかかる。

目立った外傷は無いものの、かなりボこられたおかげで体を少し動かすのがやっとだ。

あんなにやられたのは、高校時代に悪い先輩に引っかけた以来だな。

あの時も、やっぱり一方的だった。

「へっ・・・なにやってんねん、俺」

ぼそりと呟くが、返事が来ることはない。

ああ、ひもじい。腹減った。寒い。痛い。

なんでこんなことになったのだろうか。

俺はただドライブデートをした帰りだっただけなのに。

事故って、遭難して、誘拐されて、ボこられて。その挙げ句に監禁。

このまま行ったら、確実に俺は殺されるかもしれない。

「こんな死に方は嫌やな・・・」

奴らはきつと危ないカルト教団か何かだ、絶対。

それか日本に潜伏中の過激派、テロリスト集団。
外人がだらけなのも頷ける。

俺はそんな奴らのテリトリーに不覚にも侵入してしまったのだろう。

つくづく、運が無い。

このまま殺されるのを待つしかないのか。

不意に目から涙がこぼれる。

「・・・いや、どうせ殺されるならいつちょ暴れたる。そんで何人か道連れにしたる・・・」

俺は痛む体に鞭打って、ゆっくりと起きあがった。

まだ諦めるのは早い。よく考える。きっと何か、助かる方法があるはずだ。

足りない頭をフル稼働させ、脱出方法を考える。

まずはこの牢屋をよく観察してみよう。

きっと何かヒントがあるはずだ。

まずは
・
・
・
・

3メートルほどの高さに、小さな小窓がある。

次に、木で出来た丸椅子。

・ ・ ・ 特にめばしいものは無かった。

「そう、映画とかゲームみたいに上手くはいかんよな・・・」

一気にテンションが下がった。

まあ、よく考えてみれば腕を縛られている状態で、何か出来るわけがない。

とにかく、両手を自由にすることから始めよう。

ガリガリガリ・・・

煉瓦の少し尖った部分にロープを擦り付ける。

おっ！これは案外いけるな！

足下を見れば、藁のカスがぼろぼろと落ちているのが確認できた。

この調子で行けば、なんとか・・・

俺は一寸の希望に縋るように、一心不乱にロープを削り続けた。

それから1時間ほど経過。

「はあ、はあ、はあ・・・まだか・・・」

未だにロープは切れないでいた。

確かに削れてはいるのだが、いかんせんロープが太い。

これだとあと何時間削り続けなければいけないのか。

「あーーーーっつ！！！！くそつたれ！！！！外れるや！！！！」

削るのを止めて、力任せにロープを引っ張る。

が、悲しいことに外れはしなかった。

「ほんまにええって……」

俺はその場に力無く、ズルリと滑り落ちた。

このままだと、本当に……

脳裏に自分の末路が浮かび上がる。

いつか見た映画の絞首刑の様子だ。

ガチャ……

扉が開けられた。

黒い人影が、小屋の中に入ってきた。

さっきのオッサンだ。

「喜べ、楽しいショーの始まりだ」

ニヤリと気色の悪い笑みを浮かべるオッサン。

俺はそれを力無く見上げるしかできなかった。

牢屋の扉が開けられ、オッサンが中に入って来る。

そして俺の胸倉を掴み、無理矢理引っ張り起こす。

「ふん、さすがの魔物様も堪忍したようだな。良い様だ」

「黙れ・・・」

「最後まで口の減らない奴だ。まあ今更何をしても無駄だ。さつさと外に出ろ」

オッサンにケツを蹴られて、俺は小屋の外に滑り出た。

そこに聞こえる歓声。怒号。

見上げてみると、何人もの人間が中央に鎮座する薪の山を囲むようにして集まっていた。

各自、手には松明が握られ、罵声を発する度にその松明を振っていた。

「この魔物め!!」

「裁かれる!!」

「死ねー!!!!」

この空間全てに狂気が満ちていた。

「・・・ち、ちくしょう・・・俺が何をしたって言うねん」

思わず目に涙がこみ上げる。

正直言えば、今にもちびりそうだ。

「さあ、行くんだ・・・」

オッサンが指を差す。

その方向には薪の山。

俺を火あぶりにするのだろう。

有無を言わず、その場所めで連れて行かれる。

そして一本の太い丸太に体を括り付けられた。

そこに司祭のようなオッサンが現れる。

なにか呪文のような言葉を連ねると、松明を手にした。

ああ・・

俺は死ぬのか・・

今思えば、短い一生だったな・・

脳裏に楽しかった思い出や、家族、友人の顔が映える。

そして、まさに火が付けられようとした瞬間。

「て、敵だ――！！！！！！」

遠くからそんな悲鳴が聞こえた。

すると柵が壊されたのか、騒音が聞こえて、馬の蹄の音が響きわたる。

俺を囲んでいた者たちは蜘蛛の子を散らしたように、その場から逃げ出していく。

その者たちを追うように、中世ヨーロッパの騎士のような格好をした集団が馬に乗って現れた。

騎士たちは逃げまどう人々を容赦なく切りつけていく。

「おいおい・・・何や、これ」

俺は呆然として、その光景を見つめることしかできなかった。

この世の真実

丸太に固定された俺をそっちのけで、周りの奴らは剣を振り回し、戦闘に夢中になっていた。

あちこちで怒声、罵声、悲鳴が響きわたり、その様子はさながら地獄絵図のようだった。

「に、逃げる！！撤退だ！！」

一人の男が叫んだかと思うと、さっきまで俺を殺そうとしていた奴らが一目散に集落の出口を目指して走っていく。

騎士たちはそれに追い打ちをかけるべく、馬を走らせ、追いかけた。

「もう何がなんだか……」

俺はそう呟くと、周りの様子を伺った。

誰も俺の存在に気づいちゃいない。

逃げるなら今しかない。

この程度の丸太なら揺らしたら、外れるはずだ。

「ふん！……うおおお！！！」

全身の力を込めて、ゆさゆさと丸太を揺する。

揺らしてみれば、案外脆いもので、揺れの反動により、丸太が地面との固定から解放された。

そして俺は重力に従い、そのまま頭から地面に激突した。

「うっ！」

当然、そんな倒れ方をしたので否応なく顔面を強打した。

おまけに丸太の重みが俺の体を潰す。

先ほどの暴行に加えて、このダメージ。

もう何もかも嫌になる。

しかしこんなことをしている暇はない。

俺は倒れた丸太から繋がれたロープを外した。

これで自由になった。

まだ両手は自由ではないが、足さえ動けば問題ない。

車の所に戻って、さっさと脱出しよう。

ふらつく体を起こして、立ち上がる。

「車はどこや・・・」

俺がここに連行された時は、車はまだ外にあったはず・・・

とりあえず外に出よう。

そう思い足を動かした矢先のことだった。

「そこから動くな」

背後から、ドスの効いた声が聞こえた。

俺は舌打ちをしながら、後ろを振り向く。

「う．．わ．．」

そこにはまるで北斗の。に出てくるラオウみたいに体のゴツい、厳ついオッサン騎士がいた。

その騎士は俺を観察しているのか、じつくりと舐め回すように視線を下から上に移動させた。

「貴様、スペリオルの者ではないな。一体何者だ？」

騎士は低い声で俺に訪ねてきた。

す、すぺ？

何のことを言っているんだ、このコスプレ親父は。

しかし、とりあえず答えないと殺されそうなので俺は口を開いた。

「え、えつと・・・とりあえず俺はそのスペなんとかの者では無い
です。はい」

「・・・では何者だ。なぜこのような場所で囚われていたのだ。
見たところ、妙な格好をしているようだが、このあたりの者ではな
いな？」

「えつと、確かにこの辺の者ではないです。俺、遭難してもうて、
ようやく辿りついたのがここでしたが、なんかいきなり監禁されて・
・・・ってか逆に聞きますけど、ここはどこで、あんたらは何者な
んですか？しかも集団で大勢の人を殺して・・・」

俺が逆に質問すると、騎士は顔をしかめた。

「おかしいことを言う。今は戦時だぞ。敵であるスペリオル兵たちを殺して、何の問題があると言うのだ？ちなみにここはスペリオル公国の領土、ラインという土地だ。ま、今し方我らクネルスドルフ帝国の領土となったがな」

騎士はそついうと高らかに笑った。

「それはそうと貴様、東の民の者ではないのか？以前見かけた東の民によく顔つきが似ておる」

もう俺の思考回路はパンク寸前だった。

スペリオル公国？　クネルスドルフ帝国？　東の民？

ただ笑って、その場に座り込むことしか出来なかった。

その後、俺は目の前で酒を酌み交わし、騒ぎ立てる男たちの様子を眺めていた。

騎士のオッサンが言うには、ここはアールリアという世界で、大陸の覇権を巡って、三つの大国が凌ぎを削っているらしい。

今は均衡状態を保っているらしいが近年、力を付けてきた第三国、ウエンデル王国が若干優勢らしい。

・・・そんなこと鵜呑みにできるかつちゅうの。

しかし、目の前の現実や、先ほどの出来事を思い返せば、辻褄が合うことが恐ろしい。

現代日本にこんな騎士たちがいるわけもなく、殺し合いなんて論外だ。

そして全員西欧人。しかしなぜか日本語が達者だ。

これって、いつか読んだ異世界をテーマにした小説に似ている。

主人公がいきなり異世界に飛ばされて、トラブルに巻き込まれるという……

まさにこのことか！？

「おいおい……まじかよ」

俺は頭をかかえて唸った。

「どうした？」

そこに先ほどの騎士の音が。

見上げると、両手に杯を持った騎士が立っていた。

「い、いや。何でもない」

騎士は俺の横にドサツと座ると、片方の杯を渡してきた。

「この土地の名産の酒だ。飲め」

手渡された杯をじっと見つめる。

赤い液体からはブドウの良い香りが漂っており、これがワインだと言ったことが確認できた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7749q/>

軽四に乗った関西人 異世界にて

2011年2月28日12時17分発行